

泥人形の日

sunada

雷鳴は聞こえていた。

それが最初に聞いた音だった。意識は出来上がると同時に状況を理解していた。

体は土と水で出来ているといるのも。それが奇跡のような確率で起きた事も。

怒号の様な遅い爆音と衝撃波が体に届いた時には全て理解していた。

あの雷鳴が私を作ったのだ。雷が化学反応を起こして泥人形に人間と同じ意識を与えたのだ。

立ち上がる足があった。歩く事も出来た。何かに触れられる腕もあった。掴む事も出来た。

だが何に触れたのかは分からなかった、周りが真っ暗で何も見えないからだ。

手を突き出して闇雲に歩いた、風が身を削るのを感じる、体がわずかに崩れ、ひびが入る感覚があった。

痛みはないが崩れる恐れがあった、地面の泥を手につけてひびに塗りながら歩いた。

そうして歩きながら考えた、どこに行けばいいのだろうか。人に会う必要は泥人形にはない。地面に落ちた石は生きているわけでも死んでいるわけでもない。だが石に足があればどこか行くのだろうか。水が地形に沿って流れるように、花びらが風に舞うように、石も現象の力を借りて地球を旅するのだろうか。

今こうして私が理由も目的もないのに、方角も決めずに歩くのは意識があるからだろうか、それとも何らかの現象に従った運動でしかないのだろうか。

暗闇を歩く。突き出した手が何かにぶつかる事はなかった。足を止めるつもりはなかった。考える事もなく時折泥を体に塗って歩いた。

陽はいつ昇るのだろうか。何時間歩いたか分からないほど歩いた時に願いのように考えた。

もうすでに陽は登ってもいいはずなのに、なんども空を見上げたが星一つ見えない。

体感時間なんて当てにはならない、本当は一時間も経っていないのかもしれない。

ひたすら暗闇を歩んだ。もう一日を越えている時間はさまよったはずだった。

「誰かいないのか」叫んだ、「ここはどこなんだ」何でもいいから叫びたかった。気が狂いそうになっていた。

「何で陽が昇らないんだ」膝をついて倒れた。

ずっと怖くて考えるのを避けていたが、ここは地球ではないのかもしれない。なぜ空を見上げても星が見えない。

私には眼がないのかと、それすらも分からない。

今は西暦何年なのだ。私の持っている情報では地球では西暦2113年だ。だが私は雷がたまたま私を形成してしまっただけだ。地球と言う星があって西暦2113年の情報を持っていると思い込んでいるだけの意識を持った泥人形が、宇宙ではないどこか別の次元でそう思っただけなのかもしれない。

人間なんていない、地球もない、宇宙自体存在しない。

なら私はどこにいる。この意識はなんなのだ。もはやこの意識すらも疑わなければならない。歩いていると思っ込んで、叫んでいると思っっている、眼もない。あるのは動く泥人形だと思っ込んで、ただの石ころかもしれない。

これは胡蝶の夢だ。確認できない、証明できない、知ってはいけな事だ
私は宇宙の端っこ、地球と言っ星にいて、人間が西暦2113年の文明がある世界があることを信じたい。

ここは違っ星で、もしかしたら遥か未来か遥か昔かもしれない。そうであれば幸せだ。それすらもない世界なんて私は知ったくない。そんな寂しい世界あってほしくない。それを知ったくはなかつた。

それから私は崩れることにした。考えるのも知ること嫌だつたから死ぬことができて神に感謝した。

おまけ

自分を泥人形と思い込ませるという
軍の実験というオチ
と言う話のドラマ
を見たという夢
を見た友人の話
が載っているブログ
のコピペ
を二次創作した話
からインスパイアされた映画
の主題歌の歌詞
の盗作疑惑がかかっているポエム集
の一部を引用している教科書の
読書感想文
を読んで予想して書いたのがこの泥人形の日です。